



Title	表現を理解するとはどういうことか
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	年報人間科学. 1995, 16, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/8173">https://doi.org/10.18910/8173</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 表現を理解するとはどういうことか

### 〈要旨〉

グライスの構想した言語理論は、〈永久機関の反例〉をうまく扱えないように思える。「私はついに永久機関の原理を解明した」という科学者の言明は私にとって十分に有意味であるが、グライスの理論が、発言の理解に必要だとして要求する認知的な〈効果〉、すなわち私の側での〈信念の形成〉をとまなわれないからである。

それでは、この理論を洗練しつつ継承した、スベルベルとウィルソンの〈有意性理論〉は反例を捌くことができるのか。彼らはまず聞き手にとつての〈認知環境〉を、聞き手の有する〈想定〉から成るシステムであると規定する。さらに〈想定〉を〈明白さ〉という基準によって類別する。そして、ある発言を理解するためには、それが聞き手に〈明白な想定〉をもたらずという「効果」さえ生めば十分だという。

しかし〈明白さ〉とは、発言内容が真ないし蓋然的に真である想定として聞き手が受容する場合の、その想定の状態にすぎない。これでは反例を退けられないのは明らかだろう。まして作り話や間接言語行為など、さま

ざまなポリフォニーの形態に対して有意性理論ではどうすることもできない。それらが字義的に真であることはないのだから。

反例をうまく処理するには、むしろ発言の字義性と非字義性との特異な関係を再考すべきであろう。いっそう根本的には、グライスが示唆した〈認知的効果〉を、オースティンのいう〈理解〉の観点から捉え返すべきだろう。真の問題は身体機能としての〈理解〉なのである。

キーワード

有意性 明らかな想定 ポリフォニー 字義性 理解 隠喩

菅野 盾樹

## 1 〈明白さ〉というつまずき

言語理解に関するグライスの理論をテストするために、〈永久機関の反例〉を調べることにする。それが物語るのは以下のような挿話にはかならない。大学の研究室に籠もりきりだった同僚が、ある日のこと、通りすがりの私の服をとらえ興奮した口調で「おい君、ついにやったよ、永久機関の原理を解明したのだ」と喚びたものである。日頃のこの人物のいささか風変わりな言動をまんざら知らないうちにはないし、そのときの彼の精神状態がどんなかはよくわからない。しかし、同僚の発言は私の信念体系に直接の効果を及ぼすわけではない。私は〈この人は永久機関の原理を発見したのだ〉などとは信じないだろう。もしもグライスが話し手の意図した「効果」なるものを信念の形成と考えたのなら、同僚の発言は意味をなさないし、コミュニケーションを構成しないことになる。これはパラドックスではないだろうか。

それでは、グライスの分析を手直しして受け継いだスペルベルたちの〈アナロジカルな分析〉は、この「反例」を救うことができるだろうか。スペルベルとウィルソンは、問題の「効果」を単にある事実の表現を構想すること (representing a fact) にすぎないと解釈する。一見すると、このやり方でパラドックスをうまく解消できるように思えるかもしれない。たしかに永久機関の原理を同僚が発見したことなど信じられないが、それにもかかわらず、私はそうした

ことをひとつの想定として心にいただくことができるからである。

しかし、これで〈永久機関の反例〉をうまく咀嚼できたと判定する読者がいたとすれば、当人がスペルベルたちのテクストを斜め読みしかしていい点は請け合ってもよい。多分、その読者の理屈は次のようなものだろうか。命題を心にいただくやり方は一通りではない。ある命題を真として、心に受容することが〈信念〉であり、真偽におかまいなしに命題を心に――受け入れる、といえば言い過ぎだが、少なくとも――受けとめる態度が著者たちの〈想定〉ということなのだろう (たとえば社会科の授業で「もし財布を拾ったら交番にとどけましょう」という教師が発言したとする。生徒たちにとつて〈財布を拾うこと〉は単なる想定にすぎない)。この区別を〈永久機関の反例〉にあてはめることができる。私の同僚はI意図にC意図をからめて自分の発言にこめている。発言を耳にした私がC意図をキャッチしただけでただちにI意図が充足される。すなわち意図された情報伝達の効果が私の側に生じることになる。具体的に言うなら、いささか風変わりなこの研究者の思想を、ひとつの〈想定〉として私の認知環境の素材に追加することになる。結局、話し手の作りだした刺激が私の認知環境を変容せしめたのである。だからといって、私は同僚の言い分を信じたわけではない。私の信念の体系が変化したのではなく、それを一部として含む想定システムの変わったにすぎない……。

この論証は間違っている。ここで決定的に見落されているのは、〈認知環境〉に関するスペルベルたちの定義である。彼らによると、

認知環境とは明白な事実の集合のことである。私たちはすでにかなり謙歩してきた。まず「事実」を問わないことにした。「想定」だけで話を組み立てることに賛成した。私たちがも命題の受容の仕方が一通りでないことは認めたいと思う。あるいは「認識論」を「認知理論」と取り替える約束をしてもいいとさえ考えた。しかし、「想定」の知的受容可能性の問題は歴然と残っている。「想定」は問題の半分にすぎず、その「明白さ」があとの半分を占めているのである。

スperlベルたちによれば、事実の「明白さ」とは、

ある事実は次の場合にかぎって明白である。つまり、個人が心にこの事実に関する表現を構想でき、しかもこの表現を真であるものとして、ないしは恐らく真であろうものとして受け入れることができる場合である。

と定義される。<sup>①</sup>この定義をまもりながら、スperlベルとウィルソンのように、話し手のC意図がキャッチされるといわば自動的にI意図が充足されるのだという見解をとりうるものだろうか。I意図の充足とは、ひらたく言えば、発言の意味が聞き手に理解されるということである。話し手が発言にこめた意味内容が聞き手の側で復元されたもの——それにしても、復元などということがはたして可能なのか？ 可能だとして、それはどのようにしてか？——が彼らのいう「想定」に相当する。

有意性理論（以下RT）の見地で言語理解の過程を初めから辿り直してみよう。話し手が発言する（なぜといえは、私の同僚はある「想定」を心に保持したからだ）↓聞き手である私がそれを聞き取

る↓その発言に、私は同僚のC意図の徴候を見る↓瞬時をおかず、私は相手のI意図をも察知する↓これはすなわち、私の側に、話し手がオリジナルを所有していた一定の「想定」の複写が生じたということなのだ。つまり私はオリジナルな「想定」にそっくりな「想定」を自分の心にとりこんだのである↓こうして、私は同僚の発言を——完了相において——理解する。以上のステップが言語理解の一部始終だということにRTではなるのだろうか、しかしRTの基本概念的「有意性」とそれに深く結びつく「想定」の「明白さ」という概念は、言語理解過程をこのようにみなすことを禁じている。ステップの最終段階で聞き手が獲得するものは、つねに何らかの程度で明白な「想定」にすぎないはずだからである。私にとって「永久機関の原理を同僚が発見した」という「想定」には、同僚には失礼かもしれないが、毛一筋ほどの明白さも認めたいのであって、RTの枠組みに忠実なまがかり、理論的に私がそうした「想定」をいなく余地はありえない。<sup>②</sup>

ここではRTもグライスの分析がクリアできなかった不都合な例につまづいてしまう（これこそ明白な想定だと言わせていただきたい）。芝居の台詞、隠喩、条件文、間接言語行為などは、意味をもたないのだろうか。それらは言語でもコミュニケーションでもないのだろうか。そんなはずはない。俳優の言葉が観客にもたらす「想定」の「真理」とは何であろうか。しかしそれは虚構の発言であり、客観的な「真理」など問題にはならない。隠喩は字義的には偽であることがある。「あの男は狸だ」という発言によって、聞き手が心に

表象した「真なる想定」、つまりスペルベルたちのいう「明白な想定」とは何だろうか。ある人間（霊長目ヒト科の哺乳類）が同時にイヌ科の哺乳動物であるという想定なのか！

## 2 虚と実とのあわい

こうした不都合な例は、言語領域のわずかな部面を覆うにすぎない、という反論がきつと出るだろう。しかしこうした言い方にはほとんど説得力がない。たしかに私たちは日常の多くの場面で字義的で、真面目な表現をおこなっており、ここにあげたような「不真面目な」（オースティン）表現はごく少数なのかもしれない。この可能性を頭から否定するのは、言語現象に密着しなくてはならない言語理論家としてアンフェアな態度である。ところが、自家の理論にとって好ましくない言語資料がみつかる、理論家はそれがいかにも言語の本質をはずれたつまらぬもののように言うのを常としている。だが、問題の言語現象が些末であることを示すしつかりした論証はいつでも省かれてしまうのだ。<sup>③</sup>

字義的表現とそうでない表現（ポリフォニー）を古ぼけた形而上学をひきずる実証科学的手法で比較計量しようと思うのが、そもそも幻想にすぎない。言語表現のうち何パーセントが字義的で残りの何パーセントが非字義的であるなどという統計資料をだれも見たためしはないのである。むしろ日常表現の非字義性こそ自然言語の日常性だといわなくてはならない。この点は言語感覚を研ぎ澄まし言

語の実相に触れようとつとめる者なら容易に分かることだろう。

非字義性の言語現象といってもさまざまなタイプがある。その中でもだれの目にも顕著な〈比喻〉ないし〈文彩〉<sup>あざな</sup>をとりあげてみる。しかし〈比喻〉と一口に言うものの、しばしば研究者が話題にする隠喩や換喩以外に、あまりに平凡なせいか取り上げられることの少ない直喩をはじめとして、誇張、イロニー、黙説、オキシモロン、対比、曲言法など、じつに多種多様なやり方がある。これに関連しているなら、西洋人のものした伝統的な修辭学は、じつに修辭現象の博物誌ともいふべきテキスト群をなしている。往古に人々があらゆる珍奇な動物や植物や鉱物を美麗な挿し絵をそえて書物のなかに閉じこめてしまおうとしたように、修辭学のテキストは珍奇な——というのに語弊があるなら、興味ある——言語表現を採集しいつでも玩味するための、いわば観念的な動物園なのである。こうした興味ある表現手法のかけらも使用しないような言語資料がはたしてあるものだろうか。文彩が言語の例外的・周縁的現象などとはとても思えない。これをテストしたいなら、詩人や作家の文章を資料としないことを方針としてお薦めする。市井の人々の話し言葉に耳を傾けるだけでよい。あるいはいっそ、比喻とは縁遠いと思われる科学者の——それも人文科学や社会科学の領域にたずさわる者ではなく、数理一点張りだと信じられている自然科学者の理論的記述を調べてみることをお薦めする。それらの言語資料にもゆたかな修辭現象ないしエロキューションが必ずや認められるはずである。<sup>④</sup>

比喩がしばしば見えにくいことには理由がある。生まれたての比

喩は生きのよいのが取り柄で鮮明なイメージの喚起力をもっているが、言語のやりとりが繁くなるとともにその生氣はすぐに失われてしまう。両者には無垢の金貨と兌換紙幣とのちがいよりもっと大きな隔たりがある。喩が多くの人に共有され流通の範囲を拡大するために、凡庸化という代償を支払わなくてはならない。非字義性に根拠をもつイメージの喚起力——スベルベルのいう「呼び起し」(evocation)——をほどほどのものに押さえること、つまり字義性へ大きく傾斜することが必要なのである。喩には生きのよさの程度があることは多くの理論家により指摘されてきた。彼らが「生きた喩」(living metaphor)と「死んだ喩」(dead metaphor)の區別をするのも、同じ観察にもとづいている。もし喩としての息の根をすっかりとめられてしまった事例があるとすれば、それは字義的表現と変わるところがない。だからこの例が喩として気づかれないのはむしろ当然である。たとえば「釘の頭」、「あたたかな心」などの言い回しはこれに類した事例だろう。

喩を見えにくくしている要因には「呼び起し」の有無とは別に、言語的無意識の問題がある。ひとつの例を出して説明したい。「あの男は狸だ」という表現が喩であることは見易いが、「気温が高い」もそうだとはいえずかたににくい。前者の喩としての資質は言語意識の表層に浮き出ている。この表現がものの譬であることを意識しないで使用する話し手はまずいないだろう。ところが、後者がやはり喩にはかならないことは、ほとんど自覚されない。私たちはつねにある状況に身をおきつつ語ることをする。「話す主体」

(sujet parlant)こそは、哲学者が名づけたような「状況内存在」なのである(それにひきかえ、デカルト派は「思惟する主体」(ego cogitans)は世界を失ってもなお考えることが可能だと称している)。私たちはTPOにふさわしい語彙をもちい文法にかなった文を組み立てて口に出すのだが、これらの言語過程は、終始、基本的には無意識のうちでいとなまれている。もちろん適切な語の選択に迷うことがある。文法的に奇妙な言い回しをしたのに気づいて訂正することもある。そうした際には言語意識が表に立つ。そして多くの実際の場面面で、私たちは意識の表層と無意識の深みのあいだを頻りに行き来しながら、いわば半透明な意識あるいは前意識の曖昧さのただなかで表現をやり繰りしているのである。これが平均的な言語過程の姿であって、頭の前から爪先まで意識的な言語のいとなみなどないが、かといって全身を無意識に沈めた言語の働きもない。言語意識が無意識の奥底へつながりそこで朦朧となる方向と無意識から明晰な言語音が発出してくる意識化の方向とが交錯するところ、そこが表現のいとなまれる場所である。

「気温が高い」が喩であることが自覚しにくいのは、それがかなり深く無意識に根ざした表現だからである。語彙や文法を私たちの精神の無意識に帰属させることには理論的に目新しいものは何もない。古くはソシュールの「ヘラング」の観念にはすでによく似た発想がともなっていたし、近年のチョムスキー言語学という「言語能力」(linguistic competence)も本質的に無意識なものとしていられる。しかし彼らは言語を無意識の領域へと拡張することによって、反対

に無意識を言語化する誤りを犯してしまった。無意識が言語と同じように語ることになった。とはいえ、まさか無意識が分節音で語るはずはないから——だれもそんな音を聴取したことはない!——、無意識の言語化は分節音まがいの記号表現の捏造をとまなうことになる。チョムスキーが想定する〈深層構造〉によこたわる句構造とは、そうした言語中心主義が生んだキマイラではなからうか。私たちにいわせるなら、無意識は言語として語りはしない。無意識は(ふつうの意味での)言語ではないのである。でなければ、わざわざそれを〈無意識〉と呼ぶ理由が不明になりはしないか。あるいはフロイトが各種の非言語的なモデルで〈無意識〉を説明しようとした、あの惨憺たる苦心はなんだったのだろうか。〈無意識〉をなんらかの記号システムとみなすことに反対しているのではない。言語は表現領域のごく小部分をおおうにすぎない。非言語的なあらゆる表現が言語とともに人間を作り上げている。私たちの言いたいのは、多くの理論家が言語中心主義(言語でないものをそうだと言ひ、言語であるものをそうではないと言ひ張る謬見)に認識の目を曇らされているという点にすぎない。

「気温が高い」が隠喩であることを私たちがしばしば見逃してしまふのも、私たちの中にもやはり言語中心主義がわたかまっているからだ。〈高い〉というカテゴリー把握の初発の形態がどのようなものであったかを認知理論の発生的見地から精確に記述するのは必ずしも容易ではない。しかし少なくとも、このカテゴリーがはじめ人体の動作——たとえば手を伸ばしてものを掴むこと——との関連で

形づくられた点は確実だろう。〈木は高い〉とか〈キリンは高い〉といった理解の形式は、言語で述べうる〈概念〉ではなくてむしろ身体がやってみせる〈図式〉なのである。私たちはある経験領域でうまくいった図式的理解を別の領域に持ち込むことを試みるものだ(投射)。それはなにも気紛れの問題ではなく、私たちの認知の本質的制約のためである。認知とは認知のやり繰り(cognitive economy)のことである。私たちは認知的資源について歴史のはじめからつねに希少性に悩まされつづけているのである。さてこの投射が首尾よくゆけば、新たな領域が隠喩的に編成されることになる。このような算段を重ねながら人間は経験の領野を豊穡ならしめてきた。気温や物価が「高い」ことは、今ではほとんどイメージの喚起力を失ってしまっている。それらは死んだ隠喩にすぎない。にもかかわらず、出生の最中にそれを置き直してやるなら、生彩ある想像力の発動がきつと再来するはずである。しかも現在でも、この表現は、死んだような外貌の底に燦々<sup>ホト</sup>のような輝きを潜めていないわけではない。<sup>③</sup>

### 3 ゆらぎのなかの字義性

表現の非字義性については、比喩だけで話の片がつくわけではない。なんども言及した芝居の台詞はフィクションの典型であって、〈演劇〉という特殊な芸術表現に属している。フィクションないし作り話が、日常の言葉のやり取りには直接関係ないと思われがちな

のには無理もないところがある。俳優の発語行為としようとの言葉のやり取りがまったく異なるセッティングでおこなわれるのは明らかだからだ。しかし、社会言語学、コミュニケーションの民族誌、語用論などといった分野を参照するまでもなく、日常言語に数々の作り話のタイプが混入している形跡は、言語の実態を少々調べてみればすぐに知られる。

第一に私たちは「嘘」をつく。深刻な嘘はいま別の話として、「お世辞」あるいは「お愛想」(social lie)を取り上げてみよう。研究者の友人が新しい著書を私にくれたとした場合、たとえその内容が出来で賛成できない議論に満ちていたとしても、友人にすけすけと真実を述べることを私は控えるだろう。その代わりに当たり障りのないお世辞を口にして、彼の好意に感謝の意を表わし執筆の苦勞をねぎらうだろう。これはある意味では「嘘」をつくことだ。しかしそれはなにも私が不正直だからではなく、そうすることが致命的な事態を回避し、その本について真面目に批評を述べそれを著者に聞いてもらう可能性を真摯に求めたからである。真実を曲げ字義性を犠牲にした私が目指しているものは、逆説的ではあるが、ある意味で「真実のコミュニケーション」なのである。

ここではこれ以上深入りできないが、「作り話」が字義的なコミュニケーションにどれほど本質的な役割を演じているかを決して軽視すべきではない。もちろん条件文、間接言語行為などの非字義的表現も、これに劣らず二つのC、すなわちコグニション(認知)とコミュニケーションに本質的役割をはたしている。私たちの言語の

やり取りは字義性だけを律儀に遵守しているわけではないし、かといって非字義的なものの騒乱状態におちいっているのでもない。実と虚の微妙なまじり合いとして私たちの表現はある。字義的なものが意味をなすためには、非字義的なものが——あるいは密かに、あるいは明らかに——二重に響きつづけているからだ。非字義的表現をしばしば「ポリフォニー」と呼んできたのもこの点を考慮したからである。多くの声をひとつの声として聞くところに非字義的表現が成り立つのだが、それはまた、表現の字義性が成就することなのである。字義性の原理に反しながらこの要件を欠く表現はその名に値しない。それは表現としては実らなかった表現、つまり本来の表現可能性を喪失したまがいものにすぎない(とはいえ、ある意味でそれはどこまでも表現でありつづける。「表現の誤り」がありうるのはそのためである)。虚実皮膜のコミュニケーションに関しては、多様な見地から多数の研究がすでにおこなわれてきた。それらの労作にいま必要なのはデータの細部を仕上げることや理論的一般化であるより、むしろそれらが引き摺っている古めかしい哲学を清算すること、表現理論を構想するなかで知の断片化と忘却からそれらを救出することだと思われる。

大方の言語学者は「語順」、「強調」などの「パラ言語学的」(paralinguistic)現象を言語の意味にはかかわらない偶然的要素として意味論の範囲から締め出している。しかしこれらの要素が、じつは表現の意味に寄与する言語的な手法——ただしレトリカルな手法であることは明らかではなからうか。たとえば英語ではほとんど同じ

語彙をもちいて受動態と能動態という異なる語法で同一の事態を記述することができる。論理学者はこれら二つの表現が外延的に等値だと称してすませているが、言語的／言語外的という恣意的なへ対比を離れてもう一度これを見つめ直すなら、語順の違いがそれぞれ表現の含意——しばしば、これは〈語用的含意〉(pragmatic implication)や〈含み〉(implicature)と呼ばれている——の差をもたらしのがわかるだろう。たとえば、

(C) My cat eat the lizard. (「うちの猫がトカゲを食べた」)

(L) The lizard was eaten by my cat. (「トカゲはうちの猫が食べた」)

の二つの文を比べてみよう。希少な動物で絶滅が危ぶまれ国際的に保護が叫ばれているある種のトカゲを繁殖の目的で飼育している研究所でのこと、所員の不注意で彼女の猫がこともあろうにそのトカゲを食べてしまったとする。誰の飼猫がトカゲを食べたのか、という所長の詰問にこれらふた通りの返答が可能である。しかし、(C)が端的に問いに答えているのに反して、(L)のほうはいかにも冗長である。トカゲが殺されたのは既定の事実だからである。この文の有意性の欠如は意味の上で(C)との差をもたらす。まるで食べられたのはトカゲがのろまだったせいだと(L)は言いたいように聞こえる。それはあたかも、この種のトカゲは他の動物に捕食されることが自然の摂理である、という含みをほめかしているようなのである。

言語の機能をいくつ数えるか、どんな機能がそこに含まれるか、

という問題はしばしば言語理論家の議論的となってきた。私たちは、言語が人間のいのちの営みでありその存在の様態であるかぎり、最小限、認知とコミュニケーションという二つの機能を認めれば十分だと考えていることはすでに述べたが、これらの機能を別の側面ではひとつのものとして取り出せば〈カテゴリー把握〉(categorization)になるだろう。人と人とが語り合うことは何かを何かとして明言することだからである。発言の意味をその真理条件やそれが指示する事態に還元する意味論——フレーゲからデイヴィドソンに至るまで、この種の意味論が正統的なドクマとなっていることはご承知の通りである——は、私たちの実際に口にして言語の意味を取り逃がしてしまう点ではなはだ中途半端な理論だと言わざるを得ない。へうちの猫がトカゲを食べた」というのはひとつのカテゴリー把握であり、へトカゲはうちの猫が食べた」はもうひとつのカテゴリー把握である。それらが「同じ事態」の二つの異なる理解であるかぎり、それぞれの〈意味〉が異なるのは当然だと言わなくてはならない。

比較言語学の視点に立てば事柄はいっそう明瞭となるだろう。誰かが何かをどうこうする——たとえばへへーブルースがホームランを打った——という事態の構造をSOVと分節化しよう(学校の文法ではSを主語、Oを目的語、Vを他動詞などと分類しているが、いまこのことは是非は問題としない)。英語の表現だと同じ事態がSVOと分節化されるのは中学生でも知っている。数学の組合せの考えからすると、理論的には六通りの表現がありうるはずである。

ところが言語の世界は広いもので、前記の二つの方式に加えて、実際に、VSO、OVS、OSV、VOSという分節化の方式をそなえた言語があるということだ。たとえば古典アラブ語では、「打つた・ベープルスが・ホームランを」式の言い方になるという。それぞれの方式は事態を理解する仕方を異にするのであり、そのかぎりでそれぞれの方式をそなえた表現は多少とも意味が異なるのである<sup>(1)</sup>。言語学者でこうした観点を強調したのがサピアとウォーフであることはよく知られている。彼らは言語がものごとの理解に決定的な効果を及ぼすという主張を述べた(「サピア・ウォーフ仮説」)。この仮説はしばしば「言語相対主義」(linguistic relativism)の主張と取り違えられることがあるが、私たちの見るところ、それはむしろレトリックを基礎とする認知理論(rhetorical theory of cognition)と解されるべきであろう。もちろん著者たちに誤解を讀者にもたらしかねない言辭がないとはいえない。しかし、彼らの思想の本来の意義は、新たな表現論の構想のなかで中庸な解釈を受け取るべきものである<sup>(2)</sup>。

このように見てくると、記号論にとって本質的な「対比」がますます強く印象されてくる。二〇世紀の論理学者や言語理論家たちはさまざまな「対比」を打ち出すことでそれぞれの理論を構想してきた。使用(use)／意味(meaning)、意味論／語用論、パラ言語学／言語学、行為／記述、実演発語(performatives)／確認発語(confirmatives)、言語／メタ言語、使用(use)／言及(mention)……などである。それぞれはある範囲の妥当性を持ちそれなりに有効な「対

比」には違いない。しかしそれらが金科玉条のようにみなされこの範囲に収まりきらない言語現象を無視する、口実となるとき、それらには確かに言語認識の障害に転身する。

これらのどれよりもいっそう深部によこたわるのは、「字義的／非字義的」という鮮やかな「対比」ではなからうか。私たちの手にならずさえた深さの基準は「意味の可能性」にある。たとえば行為／記述という「対比」についていうなら、行為も意味でありうるし、記述も意味をもちうる。換言すれば、どちらも基準をゆうゆうと充たしている。ところが「字義的ではないもの」は、すでに意味にとりどこかネガティブな事象として出現せざるをえない。それは意味として奇妙だったり異常であったり、反対に、得も言われぬもの、卓越したものであったりする。あるいは単に意味の勘違いやしくじりだったりもする。いずれにせよ、字義的でないものは意味の尺度をはみ出ているか、押し当てようとしてもすりぬけてしまうか、そうした点で基準外のものなのである。

#### 4 いたるところのエロキューション

人間のもっとも人間らしい特質を「ホモ・ロクエンス」(homo loquens)つまり「言語を話す存在」という人間の姿に求める思想に私たちは心惹かれる。この種の人間観から実に多くのものを示唆されたことも正直に述べておこう。しかしホモ・ロクエンスの人間観には、しばしば言語に関するあられぬ幻想が紛れ込んでいるこ

とも私たちは知ったのである。一語でいうなら、言語中心主義にはかならない。ここでざっと列挙した数々の〈対比〉のそれぞれに言語中心主義が潜んでいる。その一部はすでに明らかにしたつもりであるが、それらは幾重にも纏れあいながら旧いタイプの記号論の礎石の役割を果たしている。そのまま放置して風化にまかせればよいなどと見縊らないほうがよい。個々の〈対比〉のレトリカルな本質を明らかにし、それぞれの概念としての限界の設定に今後も努力することが肝要だろう。

たしかに、人間であるということ (being human) が言葉を話すということ (speaking; locution) だと言ってもそう間違えてはいないのは、私たちのまわりの動物たちや重度の知能障害をもつ人の中に私たちの同じ言語能力をもつ例が皆無である点から明らかであろう。だがこの観察が自明なのは「言語」の定義にからくりが仕掛けられているからだ。人間——ただし正常な大人の——だけにそなわる言語能力が人間だけにそなわるといふのは、当然というも愚かである。しかしこれこそ言語中心主義ではなからうか。片言しか言えない幼児や言語中枢に障害をもった者でも、表情や仕草や音楽やダンスなど実にさまざまな表現をおこない、自分の思いを述べ他人の思想を受けとめている事実にいささかの違いもない。人間に固有の言語表現を、こうして開けてくる表現領域全体の拡がりの中に置き直してやろう。すると言語表現にすぐ隣接する特異な表現区域があることがわかるはずだ。それはもちろん人間本来の言語表現ではないが、それがしめる領域から画然と切り離されているわけでもない。

光のスペクトルが赤から橙色にいつしか連続的に移行してゆくように、言語表現にはそれに十分に類似した表現領域がつながっているのである。系統発生の観点から言うなら、近年に独立の種であることが分かった類人猿ボノボの言語表現をそこに含めることが許されるだろう。あるいは個体発生の見地に立つとき、言葉を習い憶える以前の幼児の言語表現もそこつながっていると思える。こうした表現領域の具体的構造については、残念ながら経験的研究——これらの学問を〈比較表現学〉ないし〈発達表現学〉と呼ぶことが適切であろう——がほとんどなされていないので、確実なことはあまり分らない。やや極端な言い方をするなら、社会性昆虫の記号行動 (例えば、蜜蜂のダンス) と人間言語とはどこかでつながりをもつとさえ言える。両者に単純な進化の物差しを押しあてることができない。蜜蜂のダンスには人間言語のある側面 (例えば記号表現の二重分節) がすでにそなわっているし、反対に人間言語にも、蜜蜂ダンスに顕著な特徴 (アイコンニックな記号機能) が認められるからである。

人間であることは確かに言葉を遣えるということである。ただし〈言語〉という用語の曖昧さにはくれぐれも警戒を怠ってはならない。言語中心主義者たちは、私たちの言う〈言語表現〉、すなわち固有な記号システムとして言語学的に (いわばかろうじて) その同一性を認定しうる個別言語——たとえば「日本語」や「フランス語」のように固有な名で称され世間でおおざっぱに〈自然言語〉などといわれている言語——だけに〈ランガーージュ〉(ソシユール) なり〈言

語能力) (チヨムスキー) なり (非自然的意味) (グライス) なり、人によって言い方は異なるものの、人間言語のお墨付きを授けている。これにひきかえ、私たちは他者への認知を包摂した表現ならぶつうの意味で「言語」と呼んでもかまわないと考える。たとえば、幼い子が気分が悪くなり倒れそうな不安を言いたくて母親にその青ざめた表情を見せるのは(事例(a))、大雑把に言えば幼児の言語なのだ。もちろん問題は用語ではない。グライスが正しく見抜いていたように、この事例に自然現象のなる情報とは別の言語の意味 (linguistic meaning) を認定するかどうかの問題の岐路である。

しかし私たちの見るところ、この種の意味は絵画、写真、ダンスその他、あらゆる記号表現をまとうことができる。「言語的」(linguistic) という形容詞は比喩にすぎない。前述のように、私たちがこの用語を遣うときにはその語源をつよく意識している。舌、喉、声帯、ひいては全身を使用して人はコミュニケーション表現に身を投じる。linguistic はもと lingua (舌) のことである。ここでは身体性にもとづく「機能」としての表現が問題なのである。それゆえ「言語的」(linguistic) には二つの比喩の重なりがある。舌が身体性一般を意味する点でそれは換喩であるし、身体の機能が言語機能に投射されている点でそれは隠喩なのだ。こうして、事例(a)はおおまかには「言語」と呼んでもかまわないのだが、私たちが辿りつつあるのが理論的過程であることに留意すべきだろう。そこでは何より術語の厳密さが要求される。目が口ほどにものを言うとは、ものの際えにすぎない。幼児の表情は分節音からできているわけではない。

ダンスや絵画は明らかに言語ではない (絵画の言語) や (ダンスの言語) を構想する素朴な記号論の試みは、グッドマンが明言しているように必ずや失敗する。だがこれは別の話であろう)。そこでふつうの意味の (言語表現) から区別するために、この種の表現領域を (コミュニケーション表現) と呼ぶことにしたのである。

言語表現 (大雑把に言えば、これは言語中心主義者のいう「言語」に対応する) をコミュニケーション表現の中に置き直すことは、(言語) なるカテゴリーを新規に編成する効果を生む。それは新たな言語観を形づくることである。そのポイントはこれまでの道すがらに機会がありしだい指摘してきた。第一に、言語は身体機能でありどこまでもいのちの営みである。第二に、言語の意味は身体的機能であり (概念) とは別の水準をそなえている。記号表現を裏打ちするのはむしろ (図式) なのだ。これらのポイントは意味論の構想にただちに深刻な効果をもたらす。認知意味論者が明らかにしようとしているように、言語の意味の原型は感覚・運動的図式にある。そして私たちの見るところ、図式はすでに (換喩) という原初の比喩にはかならない。そしてこの図式を想像力によって投射することでカテゴリーの拡張がはかられる。ある経験領域で換喩としてフォルムを授けられた図式が別の領域にずらされ、そこで別の換喩的図式を受け取る。こうして隠喩が生成する。隠喩とは換喩の論理的積なのである。私たちがここで提出したい仮設——これから言語資料や心理学の実験・観察によってますますその輪郭を明確にしてゆかなくてはならない仮設を一言でいうとすれば、こうなるだろう。あら

ゆる認知の基礎には比喩がある、と。

この仮設をもっと確からしいものにするための一つの方策は、換喩や隱喩の成立そのものを詳細に検討することとは別に、それ以外の比喩の形態や比喩とは言えないその他の文彩の形態について、具体的な資料に密着した入念で微細な経験的觀察を積み重ねることだろう。私たちの仮設は、人間言語が——いつてみればその生まれも育ちも——比喩をはじめとするあらゆる文彩<sup>あや</sup>なしでは存立できないことを主張している。人間の語るさま (locution) は、本質的に、文彩をとりまぜての語り方 (elocution) 以外のなものでもない。ロキエトシヨンはそのまま、ロキエトシヨンなのである。言語 (認知とコミュニケーション) の本質、それは修辭現象 (elocution) だといわなくてはならない。

思わず寄り道をしそうになったが、〈言語への道〉がどれほど拂ったかを冷静に心に問うならば、〈永久機関の反例〉という小さな問いであってさえ、確かな決着をつけるためにはここでの議論が決して寄り道などではないこと、それどころか決着のための議論がまだおおはばに不足している点を痛感せざるをえない。それとともに、スベルベルたちのアナロジカルな分析が不成功に終わっていることが改めて確認されるのである。

## 5 〈理解〉の意味論

ここから学ぶべきもっと重要な教訓は、グライス流の「反射的意

図」の構想には見込みがないということである。それを手直して継承しようとしたスベルベルとウィルソンの分析もはなはだ中途半端な結果に終わっている。問題の鍵が〈想定<sup>①</sup>の明白さ〉にあるのは確かなのだが、彼らはこの概念を十分練りあげることをしていない。

ということは〈言語意図の記号論〉ほどの道失敗に終わらざるをえないということなのか。だが一方で、RTの構想は表現の理論にとって豊かな示唆である。そうだとすると、グライス—ストロ—ソーン—スベルベルとウィルソンの系譜に早々と見切りをつけることが〈言語への道〉を辿るために賢明なやり方とは思えない。そこで私たちとしては、〈言語意図の記号論〉をめぐって編成されたこの系譜に、もうひとつの言語思想の流れを考えあわせようと思う。すなわち〈言語行為論〉として一般に知られる、オースティン—サールの系譜である。この二重の視線は言語理論の全域についても妥当するが、いまは視野をかざる必要がある。RTにおける〈想定<sup>①</sup>の明白さ〉という概念には暗がりに放置されたままの要素がある。それを明るみに引き出したのが後者の手柄ではなからうか。

かつてオースティンも、やはり〈効果〉 (effect) という観念を思い浮べながら、次のように述べたことがある。「一定の効果が達成されないかぎり、発語内行為はためたく遂行されたことにはならないし、遂行に成功したことにもしならない」と。これがグライスの〈伝達意図〉の定義にかなりよく似た言い方であることは、一見して明らかだろう。ところが、グライス流の意図の記号論の系譜は、この〈効果〉をかなり安易に考えてしまった。サールが指摘したように、

この系譜においては、それはおおむね「発語媒介的」(perlocutionary)なものとも無自覚に想定されてしまったのである。これにひきかえ、オースティンはまったく別の「効果」の発想をもっていた。彼の講義のテキストを少々追ってみることにする。例えば(と彼は述べている)、聞き手が私の言うことを聞き、そして私の言うことを何らかの意味に取る(hear)のでないかぎり、私がある人に警告したとは言えない。この意味で、発語内行為の実演に応じて、聞き手の側にある種の効果が生じているのが認められる。そしてこの効果とは、つまるところ、発語の意味と力についての理解(understanding)が生じるということである。言い換えるなら、発語内行為をやってみせるためには、聞き手の側での「了解」(uptake)が保証されねばならないのである。<sup>①</sup>

一見して、オースティンは至極当たり前のことしか述べていない。発言のあらゆる表現能力(言語行為論のカテゴリーでは、意味プラズ力)が発揮されるためには、この発言が理解されなくてはならない、というのだから。発言がもたらす「効果」とは意味と力の「理解」のことである。「想定」の明白さ<sup>②</sup>という概念に陰伏していた要素とは、この「理解」のいとなみではなからうか。

だがオースティンの指摘が自明であることに危惧を覚える向きがあるかもしれない。彼の「理解」の観念は無内容ではないだろうか。この疑念にどのように応じるか——これが「言語への道」を今後辿りうるか否かの別れ道なのである。ひとつはオースティンの言い方を単なる同義反復と受け取り、古ぼけた形而上学をひきずる旧式の

記号論に舞い戻る道である。もうひとつは、「理解」にプラグマティックな実質を認めて新たな表現理論を構想する道である。とはいえ、私たちに切に求められているのはタームの言語分析ではない。むしろ構想の更新(reconception)である。つまり、旧来の立場を守るのではなく別の見地へと移動することなのだ。この「移動」を開始するためにはまず「記号論的範疇」というカテゴリーを確保する必要がある。スペルベルたちは、「想定を表現として構想すること」(representation)を心理学的に解していた。それは具体的内容を心に思い浮べることだとされた。「表現」を彼らは単に経験的で個人的な想像力の遂行として——パース流に言えば表現の型代(トーン)として捉えていた。私たちはこれに対して、ここで問われている「想像力」とは、心理的なものとしての表現を可能にするが、それ自体は心理的なものではないひとつの記号論的範疇であると主張したい。心に内容を思い浮べるといふ心理学的水準とは別に、この水準を構成する記号論的水準の独自性を認める必要があるだろう。そしていま私たちが出会うことになった「理解」もまたこの水準に属している。もちろん「記号論的」という範疇のなかみをつまびらかにする仕事がおおはばに残っている。これまで積み上げてきた文脈でその内容はすでに多少とも示されていると思えるが、十分というにはほど遠いという批判があればそれは甘受しなくてはならない。いずれにせよ、いま重要なのはこの範疇をしっかりと手に握ることである。

心理学的水準と異なるもうひとつの水準があることは、次のよう

な言語の事実が傍証となるだろう。ふつうの意味での「理解する」は動詞である。だからとはいえ、〈理解〉が〈行為〉のカテゴリに属するとは断定できない。例えば私は外国語の文を理解しようとして辞書をひき文典にあたってみる。辞書の項目にある語義のどれがこの文に適しているかを推定したり文典の例文を読んでみたりしながら、もっとも適切な解釈を追い詰めてゆく。これらは全部時間がかかることだし（時間的規定性）、私の意志で左右できる部分が多分にある（意志による制御）。それに、大脳を含めて身体の中の部位も動員しないなら、理解を試みることはできない（器官の使用）。たしかに理解するにはさまざまな〈行為〉（action）を巻き添えにせざるをえない。たとえ身じろぎもせず息を潜め冥目して、やおら理解を試みるといった場合でも、頭の中ではなにかの行為が目まぐるしくなされているはずだ。

しかし「文の理解」はこの意味での行為ではない。意味の理解は奇跡のような思いがけない突如さで私に到来する。それが意志で左右できるような出来事ではないことは、たとえば「イス」は犬を意味する」という理解を中断しようと努めてうまくゆかずかどうか試してみればよい。この意味での〈理解〉はつねに完了相で立ち現れる。意味を理解するとは、理解してしまっただけのことである。I am understanding this meaning などとは言えない。理解したかしないか、二つに一つであり、真ん中にはない。もちろん「少し理解があった」とか「十分ではないが理解しかかっている」とか言うことができる。けれどもこれは理解の深さや進度を言うのであって、浅

い理解は浅いなりにすでに理解してしまっているのだし、遅い理解も理解してしまっている点で他の理解と些かの違いもない。このような様態の〈理解〉を、とりあえず〈機能〉ないし〈作用〉（act）の範疇に含めておきたい。L意図に特有な「効果」とは表現の〈理解〉のことなのである。表現の理解とは、そうするのが人間であれ動物であれ、言語の機能ないし作用に身を委ねることである。それは同胞たちとコミュニケーションしながらカテゴリを把握し、そのようにして事態を認知し意思を疎通すること、一言でいえば、〈言語を生きる〉ということである。

## 6 身体機能としての〈理解〉

発言の〈効果〉なる概念をグライス流儀の記号論の袋小路から救い出し、むしろオースティンの言語哲学の源へと差し戻してやろう。しかし、オースティンの〈理解〉の観念を継承すればそれで十分だとは言えない。実際、オースティンは〈理解〉についてなかみのある議論をほとんどしていないし、彼のテキストからは〈理解〉が意味論にとっての鍵となるという自覚も感知できないのである。彼の功績はグライス流の言語理解の理論に疑問符をつけ避けがたい問題提起を行なうと同時に、〈理解〉という解明をまちのぞむ問いを正しく設けた点にある。

私たちの見るところ、言語の〈理解〉はどこまでも生命機能の隠喩として概念化されねばならない。その際には、きつと日常語の

〈Hand〉の解釈学(ないし意味論)が役立つにちがいない。将来のそうした学問のためにここでメモ程度の記述を試みて、あながち無駄とは言えないだろう。

さて、この動詞はふるいゲルマン語に由来するもので、その語源は〈手でつかむ〉ないし〈手で取る〉という意味にあったらしい。では、〈つかむ〉とはどんなことだろうか。言語理解の分析を〈つかみ〉の身体機能の解明としておしすすめる道がここに拓かれる。これはそう安直な作業ではない。さまざまな問題が目白押しに並んでいる。ひとつは〈機能〉ないし〈作用〉という概念を機会あることと絶えず明確化するよう努めなくてはならない。特に種々の身体の〈行為〉とその展開のうちに忽然と出現する〈機能〉との関係をはつきりさせる必要がある。

例えば〈倒立〉という身体機能を考えてみよう。いわゆる三点倒立は額と肘の形つくる三角形を底面として、体軀をその面に垂直に立てることによって成し遂げられる。しかし実際の倒立はこのような立体幾何学によっては記述できないことが観察されている。〈倒立〉をおこなう人は、まず幾何学的に規定される姿勢をその規定どおりに構築し、次いでこの姿勢を堅固に維持することをやっているのだろうか。しかしそのようなやり方は初心者のものであり、そんな風にすればたいがい逆立ちは崩れてしまうだろう。熟達者がやっているのはそうしたスタティックな幾何学ではなく非線形の力学である。不安定な体幹と下肢の絶え間ないゆらぎを絶えず上半身の協調的なゆらぎによって吸収してバランスをとることが問題なのだ。

これを一般化してこう言っただけではいけないだろうか。輻輳する行為のゆらぎのただ中から単一な機能が出現するのだ、と。

〈つかみ〉が語源的に言っただけで手を用いた種々の行為の組合せのただ中で実現される機能であることは自明であろう。またわかることは、〈つかみ〉という概念が〈所有〉のそれと密接に関係するといふ点である。ではこの二つの概念のかかわりが精確に言っただけのようなものなのか。これも残された重要な問題である。分析に手をつけた途端にこんな問いがたちまち現われてくる始末なのだから、理解の身体機能論がそう容易であるはずはない。ここで隠喩のほんの片端をかいまることで、ひとまず今回の議論を締め括ることにしたい。理解の消化性(digestive nature)である。〈理解〉の隠喩の構成にはまた別の側面があるが——例えば、理解の触覚性(tactile nature)——、それについては次回に詳説する予定である。ちなみにオースティンの用例にも知られるように、ここでいう〈理解〉と〈了解〉(uptake)とにさしたる違いはないことをお断わりしておく。

〈了解〉とは例えば生物が栄養を体内に摂取する(uptake)ようなものである。栄養が血となり肉となるのはどうしても生体反応のエヴォリューションを待つ必要がある。栄養の取り込み(歯で噛み砕くこと、嚥下すること、など)と身体器官の変容とはたしかに一連の出来事としてつながっている。しかしこのつながりを可能にするのは、出来事の臨界をもたらす切断の原理なのである。境目をもたぬものはそもそもそれらを連結することができない。食物を咀

嚼するのは一つのことであり、それが血肉となるのはもう一つのことである。それぞれの出来事は別種の時間性に宰領されているのである。同じように、発言内容の取り込みは聞き手の認知的態度の変容をただちに意味するわけではない。I意図の要因をなす〈効果〉とは、発言内容を単に摂取することにすぎない。ここには特有な〈所有〉概念がはっきりと示されている。同僚の学者が喚び出したことがらを私はまったく信じないが、それでも当人が何をいわんとしているのか理解できるのは、その発言によって何らかの効果が生じたためである。こうして、I意図——これにはC意図が必ずともなうという——の背景とは別の哲学的文脈で、新規に〈I意図〉を生命の機能として概念化すれば、スベルベルたちの意図の複合は不要となるにちがいない。

理解の消化性には、表現のやり取りに潜むある種の残酷さが示されている。話し手が差し出す表現を聞き手が理解するということは、話し手の表現——それは言語的器官として、話し手の身体の延長でありその半身だとさえ言いうる——を聞き手が捕捉し、消化器官である口に取り込み、歯で噛み砕き、飲み込み、胃に送り込み咀嚼する……という一連の過程にゆだねることである。消化するためには破壊しなくてはならない。表現がいのちの営みだとすれば、それを理解するためにはどうしても表現の死を回避できないのだ。たとえそれが別のいのちを養うためであるとしても、そのようにして、結局は、死ななくてはならなかった表現を差し出した者に、いのちの復活がありうるのだとしても。

## 7 結論

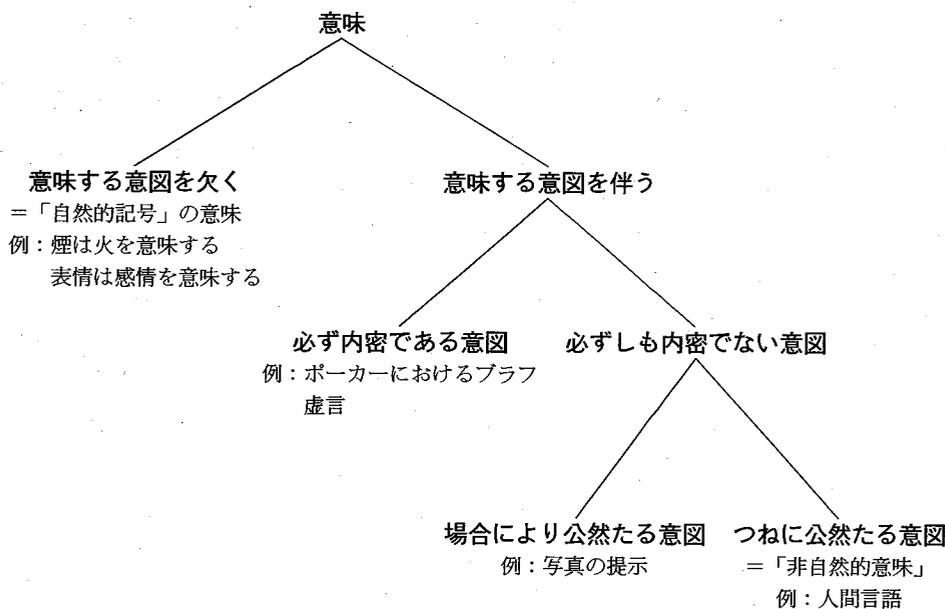
ここまでの考察からひきだされる結論を中間報告のかたちにまとめたいと思う。グライスが基礎を据えた〈意図の記号論〉は、言語理論としては遺憾ながら成り立たない。彼が構想した、〈自然の意味(natural meaning)／非自然の意味(non-natural meaning)〉の〈対比〉ははなはだ不十分なものである。彼はまた、〈誰かになにかを思わせる(getting someone to think)／なにかを告げる(telling)〉という〈対比〉を設けている。例えば発車のベルは、バスの乗客にやがてこの乗り物が動きだすだろうという予期を抱かせる信号にすぎないが、運転手が「発車します、ご注意ください」という声は、まさしく発車を告げる言語行為なのだという。いささか装いの異なるこの区別が、初めのそれと同様、まったく不十分なことはわざわざ述べるまでもない。

とはいえ、私たちはこうした〈対比〉が表現のなかに与えられていないと言うつもりはないし、記号一般に関して形成する私たちの理解の一部であることも確かなことだろう。私たちの言いたいのは、これらの区別は記号論にとっての〈問題〉にすぎないということである。それらは記号現象への道をつけるための記述概念であっても、現象を説明する原理ではない。別の折りに述べたように、グライスの意味の二分法は〈客観主義〉の形而上学に、無自覚にせよ依拠している。(そして、理論にとってつねに致命的なのは、言うまで

もなく「無自覚」ということである。グライスは記号に対してなにか「意図」といったものを想定するのがノンセンスに映る事例にともなう意味を「自然的」と称した。そして公然たる意図が実現した記号、すなわち「言語」の意味を「非自然的」と呼んだ。生きた人間の場合では、話し手と聞き手が対称的な位置を客観的な環境の中にしめている。話し手の意図が公然性をもつかもたないか、もつとすればどの程度もつかで、さまざまな記号の形態が成り立つ。そしてこの意図が完全にオープンであるのはひとり言語の場合だけである。グライスによると、言語とはこうした意図を話し手と聞き手のあいだで相互に公開しあうやり方のことにはかならない（意図の公然性（overtness of intention）の観念が、いかにグライスの系譜の記号論にとって重大な意義をもつかに留意すべきである。この問題は次回に詳しく述べたい）。そして聞き手における「言語理解」とは、話し手から手渡された言語の意図を認知して、聞き手が意図された内容を復元すること（効果）なのである。私たち自身の構想を浮彫りにするためにも、とりあえず以上に辿ってきたグライスの意味分析の概要を図のかたちにして示しておきたい。私たちの対案は次の機会に示そうと思う。

スペルベルたちの有意性理論についていうなら、この「意図の記号論」を継承した部面にかぎり、私たちはそれを受け入れることができる。しかし、有意性理論のもろもろの概念——有意性、想定、明白な事実（manifest facts）、直示（ostension）など——は、むしろ正統の「意図の記号論」とは違った理論枠組みを要求している。

図：グライスによる「意味」の分類



この枠組みをいっそう明らかにすること、それによって有意性理論を再編成することが、来るべき言語理論あるいは記号論の課題になるだろう。私たちがへし意図を提案してこれを基軸とするいくつかの考察をおこなうのは、そうした課題の一部なりとも果たしたいからである。

#### 注

- (1) Serber and Wilson, *Relevance*, Oxford: Blackwell, 1986, p.39.
- (2) スペルベルたちが「表現の構想」(あるいは短く「表現」Representation)を心理学的範疇とよめつけている風が見られるのは問題である。ある想定をもつことは、それを具体的な表象やイメージとして心に思い浮べることだとされているのだ。ここに認められるのはあまりに安直な「民間認知理論」(folk cognitivism)であり「意味の心理主義」ではなからうか。ある想定が明白であるという効果が聞き手に生じたとき、聞き手は、実際に、ひとつの命題に真理を帰属させながら心に思うのだろうか。ここには問題が山積している。第一に、命題を心理的な実体と見なせるものだろうか。それは心理でも物理でもない第三の領域に属するものではないだろうか。第二に、心理的な実体とはどんなものなのか。それはどこにどんな形態をとって存在しているのだろうか。第三に、発言を聞きながら人はいちいち、これは真理だこれは違うという心理的評価をするのだろうか。もちろんそうした評価が暗黙裏になされることもあるかもしれない。しかし発言の意味を取る(これが言葉を知ることである)が評価に先行するのではないのか……。しかしこれらの問題(まだ他にもあるかもしれない)が解決されたとしても、RTの言語理解の説明にとって致命的な問題がある。それは、本文で述べた「想定(明白さ)」という観念に

ほかならない。

- (3) 「オノマトペ」についてソシュールがとった態度がまさにそうだった。この点を、菅野盾樹「恣意性の神話」(『記号学研究15』東海大学出版会、一九九五、所収)でやや詳しく指摘したので参照していただきたい。
- (4) 自然科学の記述方式にとり比喩がどんなに本質的な役割を演じているかについて、例えばハッセ『科学・モデル・アナロジー』(高田紀代志訳)、培風館、一九八六、を見よ。
- (5) 私たちは隠喩の観察にあたって、三つの基準をもちいて隠喩を分類することを提案している。菅野盾樹「メタファーの記号論」、勁草書房、一九八五、特に二〇八〜二一〇頁を参照。
- (6) 「嘘」について、菅野盾樹「嘘をつくのはなぜわるい」(『哲学雑誌』七八一号、有斐閣、一九九四、所収)がまとまった考察をしている。「嘘」に関する重要な文献の一部にもそこで言及したので参照していただきたい。
- (7) 語順の問題について簡略な考察は、Smith, N. and Wilson, D., *Modern Linguistics*, Bloomington & London, 1979, にあす。言語要素の意味はつねに文脈に規定される、という原理(意味の文脈依存性の原理)は、つとにサールによって明確に述べられた(Saarl, J., 'Literal Meaning' in his *Expression and Meaning*, London: Cambridge University Press, 1979)。もちろんこの原理はRTの言語思想の基礎のひとつである。さらにこれは認知意味論者によっても共有された原理に他ならない(例えば、ジョンソン『心のなかの身体』、紀伊國屋書店、一九九一、を参照)。この原理を真面目に受けとめるなら、従来の記号論の区分(構文論―意味論―語用論)や本文で触れた、言語学/パラ言語学といった「対比」は便利な発見的用具以上のものではないことになる。

(8) 菅野盾樹『メタファーの記号論』、一九八五、勁草書房、第8章「隠喩と世界」、特に二三八〜二四一頁を参照。

(9) 菅野盾樹「原初の比喩としての〈換喩〉」、『記号学研究14』、東海大学出版会、一九九四。

(10) Austin, J., *How to Do Things with Words*, Oxford: Oxford University Press, 1962, pp. 115-116, p. 138.

(11) *ibid.*

(12) 認知心理学者・佐々木正人氏の講義（大阪大学人間科学部、一九九四年度）による。

(13) グライス流の記号論の形而上学的制約については、菅野盾樹「自然的記号」の誤謬（『大阪大学人間科学部紀要』、一九九四、所収）も参照されたい。ここに掲げた図は、レカナティ（『ことばの運命』、新曜社、一九八二、二二四頁）のものを少々手直ししたものである。

#### 追記

表現理論の基礎を再点検するために、筆者は同じ表題のもとにすでに三つの文章を執筆している（『季刊 *ichiro*』、日本ペリエールアートセンター、第三〇〜三二号、第三四号、一九九四〜一九九五）。この文章はその続編をなすが、ひとまず独立のものとして読んでいただくよう心がけた。とはいえやはり不十分な面が多い点を御詫びしなくてはならない。それらの論文の参照をお願いする次第である。

## What does it mean to understand representations?

Grician theory of linguistic understanding isn't sufficiently good because it cannot give any solution to some counterexamples. If a scientist makes an utterance such as 'I've at last discovered the principle of the perpetual motion machine!', it is pretty meaningful to me though I never believe that he has discovered such the principle. Getting a belief isn't a necessary condition for me to understand an utterance. Sperber and Wilson try to explicate this counterexample by introducing some new conceptions such as 'manifest assumption' and 'cognitive environment'. They have the objective to renew Grician theory from the 'relevance'-based viewpoint. But it is evident that their endeavor is unsuccessful. They define a 'cognitive environment' to an individual as a set of facts that are manifest to him. And a fact is manifest to him, according to them, if and only if he is capable of representing it mentally and accepting its representation as true or probably true. However I never accept the assumption that the scientist has discovered the principle of the perpetual motion machine to be manifest when he talked to me. In addition it is very evident the kind of utterances that I call 'polyphony' such as metaphor, indirect speech act, hypothetical, fiction and so on may be meaningful without being literally true or probably true. The relevance theory cannot deal with these utterances. We need minute observation upon the special relation between literalness and nonliteralness of utterances to take the way out. The our central insight is that literalness always more or less goes with nonliteralness. More fundamentally the cognitive effect on the hearer's side which Grice suggests as a condition for the meaningfulness of speaker's utterance should be renewed from the 'uptake'-based point of view which Austin presented in his famous lectures.

What matters is uptake or understanding as the bodily function.

### Key Words

relevance, manifest assumption, polyphony, literalness, understanding, metaphor